

斎藤 成雄 Yoshio-Saito

第九卷

# 日本の解放

太平洋戦争

りん書房



# 日本の解放

太平洋戦争

斎藤 成雄



〈著者略歴〉

本 名 斎藤成雄（さいとう よしお）  
出身地 栃木県那須郡那須町大字東熊田2084  
現在、日本民主主義文学同盟員  
現住所 神奈川県海老名市今泉 1-9-12  
TEL 0462-34-1483  
既 刊 『ゆれうごく中学』近代文藝社  
非行と現代中学教育問題小説を描く。  
第一巻『愛は死を越えて永遠に』近代文藝社  
明治11年竹橋暴動事件の全貌を証すために描く。  
第二巻『死すとも自由は死なず』近代文藝社  
明治14年の政変、脱獄、加波山事件を描く。  
第三巻『秩父に革命の嵐吹く』近代文藝社  
秩父暴動事件を全面的に描く。  
第四巻『亡国に至るを知らざるは亡国なり』近代文藝社  
明治20年代の足尾鉾毒事件を描く。  
第五巻『どっこい生きて動ぜず』近代文藝社  
日露戦争直後の谷中村事件を描く。  
第六巻『秋水の華は散ってゆく』近代文藝社  
大逆事件とは――  
第七巻『日本の解放』近代文藝社  
大正デモクラシー  
第八巻『日本の解放』りん書房  
満州事変、二・二六事件  
『蟻地獄』りん書房  
バブル経済の破綻

第九巻 日本解放 ―太平洋戦争―

1992年9月10日 第1刷

著 者 斎藤 成雄  
発行者 青木美保子  
発行所 株式会社 りん書房  
〒106 東京都港区六本木3-15-2-209  
TEL 03-5563-0891  
定 価 1,400円（本体 1,359円）  
印刷所 株式会社 飛来社

©Yoshio Saito 1992 Printed in Japan

ISBN4-947665-00-9 C0093 P1400E

## 目次

|          |     |
|----------|-----|
| ノモンハン事件  | 5   |
| 第二次大戦の勃発 | 39  |
| 太平洋戦争    | 69  |
| 中国戦線異常あり | 99  |
| 東京大空襲    | 131 |
| 原爆投下     | 173 |
| 大日本帝国降伏す | 225 |



# 第九卷 日本の解放

——太平洋戦争——



# ノモンハン事件



一九三九年（昭和十四年）、ドイツにはヒトラー、イタリアにはムッソリーニが台頭し、日本の軍国主義と防共協定がにわかにもちあがる。一方の汪兆銘は重慶を脱出しハノイに亡命した。そこで日本と取引し和平を蔣介石との間を結ぼうという、わけのわからないことを言い出した。やがて日本は、中国の占領地域に汪兆銘のかいらい政権をつくることになる。

七月二日から五日にかけ、ノモンハンで日本側の大攻勢が展開されたが、これはソ連の近代化された重火力の前にあえなく失敗に終わる。七月末から日本軍は再度の大攻撃の準備に着手した。ソ連側はジュコフ指揮下の第一軍団・外蒙軍、その両者をまとめるシュテルン司令官のもとに方面集団を形成し、膨大な武器・弾薬を集積した。八月二十日早朝、ソ連空軍百五十機以上による、日本軍陣地への猛攻撃。続いて地上軍による全戦線に攻撃が開始された。数日にわたる死闘の結果は、またしても日本軍にとって惨憺たる敗北となった。二十九日には最後まで抵抗した日本軍左翼が撃破され、三十一日に日本側は外蒙側のいう国境外に駆逐されたのである。この間に、第二十三師団が投入した一万五千余の兵員中の三十二パーセントの戦死、三十六パーセントの戦傷、五パーセントの戦病、あわせて約七十三パーセントの壊滅的な損害を受けた。

この戦争は日本とソ連との最初の本格的な近代戦であった。この戦闘によって、日本軍の装備の近代化がいかに遅れているかが暴露された。そのことは軍部にとって一大衝撃となった。中根大造大尉は第二十三師団にいたのだから、青木家はおだやかではなかった。

「歌子さんからは、なんの連絡もないのだから無事なのでしょうね」と、いうのが結論のようなものである。

青木作蔵も今年六十七歳になり、市子も六十歳ともなれば老境への入口である。齡心情の風景にまでも老いの風はすき間風のように入り込んでくる。

「どうも、この戦争は世界的な大きな運命を決定するような、そんな不吉な予感のようなものを感じる。それも年齢のせいのようなでもあるし、そうでもないようにも思う。多分にソ連の中国援助が気に入らないから報復したのだろうが、そうはいかなかった。これは日本の軍部にとっては大変な衝撃だろう」

「お父さん、これは単なるソ連軍と日本軍との戦いだったのですか。相手の国はノモンハンの草原地帯はモンゴルの領内でしょう。それこそユーラシア大陸からヨーロッパまでの世界最大の国を創った、ジンギスハンの国ですよ。そういうまぼろしの民族ではないのですか」

「それもあるな。元のような国はモスクワまで支配した騎馬の遊牧民族だ。そういうモンゴルの草原での戦争だから、彼等にしてみればスポーツをしているようなものかもしれない。そのうえにソ連の重火器が大量に持ち込まれる。それこそ鬼に金棒だ」

「大造は、まだ三十三歳ですよ。人生はこれからですもの。戦争はなんのためにしているの

しよう。連戦連勝ばかりしていると、負けることを知らないからなんのために戦っているのかを考えないでしょう。負けて初めて、なんのための戦争なのかと考えるのよ。私も六十歳にもなって初めて立ち止まって考えられたけれども、誰も負けることを考えようとは思わないわ。自分たちの息子が危ないとなってあわてているのよ」

市子にとっては自分の腹を痛めた子であるから、どうにもやりきれない気持ちだった。

「モンゴルは満州よりも極端に人口も少ない。国土は広大なのに六、七十万人しか住んでいない。だから植民地としてはうまみがある、そう思ったのだろうが、モンゴルの民族は、昔世界最大の国だった時代もあった。そうした誇り高い民族であることを忘れてはいけないんだ。だから惨憺たる負け方をするんだ」

作蔵はいまましい気持ちになる。ソ連は革命の軍隊であるから強い。なりふりかまわない五か年計画、それは消費生活を切り詰め、あらゆる犠牲をはらっても輸出をし、重工業製品を輸入する。それこそ並大抵な努力ではあるまい。そのためにどれだけの人が犠牲になっているかわかるものでない。それでも革命の国家だから、労働者と農民、そして一般人と知識階級とのみんなの国家だからできる。婦人も平等の国家だからむちゃくちゃな五か年計画もできるのだ。その兵士もやはり革命兵士だから強いのであろう。

それならば息子の大造はどうなる。作蔵は年を取り気持ちも弱くなつて、泣きたいようなあわれな自分をそこに見るのだった。そんな弱気に走り勝ちな時に孫たちの顔を見ると、ようやく自分を取り戻すことができるのが不思議だった。

「お父さん。孫も軍隊にゆくのでしょうか。もう大造だけでたくさんです。戦争はひろがるばかりですものね。これからソ連やモンゴルとも戦争をしてゆくのなら、大造の生命はいくつあっても足りませんよ」

「いやそれはあるまい。ヨーロッパでヒトラーのドイツが戦争を始めたからには、ソ連は日本と戦争はできまい。しかし、いまに世界中に火がつきそうだ。それこそ第二次大戦になるかもしれない。その方が大変なことになる」

「そうすると、日中戦争はどうなつてゆくかわかりませんね。中国の広大な国土の奥にまで侵攻すればするほど、補給は益々困難になつてくるでしょう。そのために現地で略奪することになる。いつそう中国の国土を荒廃する。戦争ほど人民を苦しめるものはありませんね」

「ノモンハン事件では、蒋介石や中国の人は、自分たちが勝利したように喜んでらう。日本の軍隊によつて、何十万人ものが殺され、何百万人、何千万人もが難民として家を失い、職を失い、家族を失っている。その人たちがどんな気持ちか、想像もできない」

「そういうことをする大造たちを、中国の人が許すわけがないわ。歌子さんはどうしているかしらね。美佐ちゃんお手紙を出して聞いてくださいよ」

あまりにも恐るべき事件であり、負ける筈のない無敵の帝国軍隊が敗北したのである。南京の大虐殺の時には、さっそく歌子から手紙が来た。そのなかで中国の人は、日本人を野蛮人とまで極言し憤激している。毎日周囲の憤りのうずまく中国の人民のなかで、小さくなつて生きなければならぬ、悲痛な日々を訴えていた。それはどれほど辛いことであるか、しかし内地

にいて、世間では連戦連勝を祝つてばかりいるのだからは想像もつかない。それがノモンハンでは大敗北をしたのである。中国に勝利者ぶつていた日本人はどれだけ笑われ、のろわれているかわからない。そんな歌子の姿を想像するとじつとしていられなくなり、美佐は手紙を書いた。

「歌子さん、お元気ですか。ノモンハンでは日本の天下無敵といわれた軍隊が敗れるという報道に日本中の人々がどれだけ心配しているかわかりません。同じ師団に大造さんも居られたものと思うのです。そのために父母も、とても心配しております。そのうえ歌子さんもまわりの中国の人々から笑われたり、嫌な思いをなさっているでしょう。どうしてあげればいいのか判りません。それを耐えるのがやつぱり軍人の妻なのかもしれません。けれどもこれからもソ連と戦争が続くようなことがあれば、それこそ取り返しがつかなくなるように思われます。できれば、万一のことを考えて、日本にお帰りになった方がいんじゃないでしょうか。折角満州までついてゆかれたのに、冷たいようですが、あまりにも戦争が野蛮すぎ残酷すぎるからです。歌子さんの愛情ではどうにもならないように思われます。人生の大切な道が戦争によって断たれないようにすべきだと思います。そうでなくても、この戦争のためにどれだけの人が殺され死んで行つたでしょうか。それこそ何十万だか判りません。これからは何百万人、何千万人死ぬか、そして傷つるか判りません。その一人一人には、みんな大切な人生の道があるのです。だから戦争は嫌です。なるべく早くお帰りのさいね」

美佐は、書くつもりでなかったことまでうつかり書いてしまった。けれども読み返してみる

と真実のように思われる。戦争している相手の土地は住める所ではない。それは紛れもない真実であろう。そう思つて市子に見せると、やっぱり歌子は帰るべきだということで、そのまま手紙をだした。

その頃は中根中佐は軍隊を引退していた。二・二六事件以後は日本の軍人への夢も消え、どこまでも泥沼にはいつてゆく中国情勢にやり切れなくなつたのではないかと作蔵は勝手に想像し、ノモンハン事件のこともあり世田ヶ谷の中根家を訪ねた。

中根も作蔵が来るのを待つていたようで、さつそくノモンハン事件のことにふれた。

「モンゴルが強いのはソ連のような社会主義国だからです。それを何も知らないで、ソ連が中国を援助しているのに対し、報復したつもりが、かえつてやられてしまった」

「モンゴルは社会主義の国ですか」

「そう。でも遊牧民族だからソ連とは全く違う。しかし、一九二〇年にはソ連の赤軍が進駐し人民革命をやつたんだ」

「それじゃ、もうかれこれ二十年にもなることになりますね」

作蔵は全く驚いた。社会主義国はソ連一国だとばかり思つていたのに、モンゴルはソ連の軍隊が入つて革命を起こしたとなればたしかに社会主義国となつてゐる筈である。それも二十年も前のことになり、ソ連と共に社会主義の道をひたすら歩んできたことになるのだ。ならばソ連と一緒になつて、日本の軍隊と戦う筈である。強力な軍隊になつていても不思議ではない。

「ソ連は五か年計画に総力をあげて食糧まで輸出し、重化学工業製品を輸入している。そのためにソ連の戦車は日本の数倍も能力のある強力なもので、チェーンがはずれても車輪だけで走れる。そのうえ大砲は強力で砲弾は直線に飛んでくる。日本の大砲のように高く上がりながら落下するよりも、それは破壊力がある。なんとしてもモンゴルの騎兵隊はものすごい勢いで走ってきても機関銃で速射して去る。何千もの一糸乱れない駿足で、七百年も前は、あの騎兵隊で世界一の大帝國を創つた民族だ。それは強い軍隊だ」

「それじゃ、やっぱり日本はまけますね」

「ノモンハンの敗北は中国での敗北をも意味している。中国大陆からノモンハンに大量の飛行機から大砲や戦車を結集してやられた。その間に、ソ連からこれまた大量の兵器が中国に送られたので、中国の方がはるかに多くなり優勢になってしまった。そのために反撃をされると危ない」

作蔵は大造のことがいつ言われるか待っているのに、いつこうに言う気配がない。なんとなく軍人を退役したせいか、あんまり国勢の悪口も言わない代わり、老けこんだように思われた。その時に庭では孫の陽一と洋子が遊んでいたので、話題をその方にかえた。

「陽一くんも洋子ちゃんも大きくなりました。孫の顔を見るのがいちばん楽しいですね」

「そうだな。陽一も七歳だし、洋子も五歳だ。この子等の父親も可哀相なことをした。戦争は冷酷なもので勝つ戦争はいいが、負けると敗残兵の汚名を受けることになる。本来は重火器の質の相違の問題だから仕方ないようなものの、シベリア出兵の時にも敗れた。そうなると赤軍

と皇軍の質の問題にもなる。そのために余計に負けて帰還すれば、嫌な思いをしなければならぬ。可愛い孫を見ていると可哀相になってくる」

作蔵は軍人精神が判らなかつたが、負けることはやはり大変なことなのだと改めて知つた。モンゴルも社会主義の国なら赤軍と同じように訓練された騎兵隊なのであらう。その両軍が連合した飛行機で猛攻撃をあげれば、いかに強い日本の軍隊でもたまつたものではあるまい。そこに駿足の騎兵隊が機関銃を以て速射しようものなら、平原だから逃げられない。

「戦争は勝利を見込んでやる。最初は二、三か月で片付いて蒋介石は屈伏する、そう思ったのだらうが、そこにソ連の援助が加勢してきた。もしソ連の援助がなければ、やつぱり軍部の予想どおりだったかもしれません。しかしソ連という国はまったく判らない国です。社会主義の政権になって二十年かそこいらなのに、そんなに中国までも援助できるのでしようか。それこそ軍部も予想しなかつたことだと思ひますね」

「ソ連の五か年計画は、社会主義だからできるのであつて、資本主義の国ではできない。いまの日本の飛行機はなんでも作ればいい主義で、生産するからすぐ故障する。戦争は資本家を儲けさせているようなものだ。あれでは勝てない」

作蔵は意外なことを聞かされたように思つた。社会主義を評価しているわけでもあるまいが、計画経済そのものが問題なく成功しているからには認めないわけにいかない。とはいふものの老境に入るとやたらに世の中が見えてくる。それも確実なあたりで見える。黙つていられない心境が、ついに軍役までも放棄したようにも思われる。それも人生の苦い味なのかもしれない。